

さたけ散歩

第3号

◇次号予告◇

次回のテーマは「金八先生の歩いた道 北千住」

東京都足立区千住を特集します。



新吉原と見返り柳 吉原



新吉原 (東京都台東区)



いまから約400年前、江戸時代初期の1617年に日本橋葦屋町(現在の東京都中央区日本橋人形町)に遊廓(ゆうかく)が許可され、幕府公認の吉原遊廓(よしわらゆうかく)が誕生しました。「吉原」の語源は吉原遊廓の開拓者である庄司甚内(しょうじじんない)の出身地が東海道の宿場町「吉原」出身であったという説と、葦の生い茂る低湿地を開拓して築かれたためという説があります(葦は「悪し(あし)」に通じるのを忍んで、



見返り柳

1657年、明暦の大火(めいれきのたいか)により吉原遊廓が焼失すると、浅草寺裏手の現在地(東京都台東区千束4丁目及び3丁目の一部)に移転されることとなります。そのため、日本橋時代を元吉原(もとよしわら)、現在地を新吉原(しんよしわら)と呼びます。



吉原神社

「三遊亭歌笑(さんゆうていかしやう)塚」終戦直後の日本で明るい笑いを提供し、「爆笑王」や「笑いの水爆」と呼ばれ、一世を風靡した三代目三遊亭歌笑。



新吉原における名所の一つとなっているのが「見返り柳」。遊廓帰りの客が後ろ髪を引かれる思いを抱きつつ、この柳のあたりで遊廓を振り返ったことから名付けられた



東京都荒川区南千住の浄閑寺(じょうかんじ:地図②)。新吉原遊廓の誕生より2年早い1655年の創建と伝えられている浄閑寺は、「投込寺(なげこみでら)」とも称されています。1855年、安政の大地震により被災した遊女



「生まれては苦界 死しては浄閑寺」と川柳に詠まれ、境内には「新吉原総霊塔」が建立されました。



■アクセス (見返り柳)
東京メトロ日比谷線三ノ輪駅下車徒歩10分



永井荷風詩碑及び筆塚



永井荷風詩碑及び筆塚

荷風は全財産を常に持ち歩いており、死去の際はポストバッグに総額2,334万円を超える預金通帳と現金31万円余が入れられていたそうです。



荷風

吉原を歩いて

『あめりか物語』や『断腸亭日乗(だんちやうていにちじやう)』などの作品で知られる小説家・永井荷風(ながいこうふう)は浄閑寺を好んで訪れ、いずれは自身もここに葬られたいと周囲に話していたそうです。荷風は遊女たちの短く儂い(はかない)人生に何かを感じることがあったのでしょう。昭和38年には「新吉原総霊塔」と向かい合わせに、永井荷風の詩碑と筆塚が建立されました。